

易虎故種全集

島尾敏雄全集 第8巻

一九八二年三月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇二

電話東京二五五局四五〇一(代巻・四五〇三)編集

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1982 Toshio Shimao

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〔検印廃止〕落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

第8卷

死の棘

第一章 離脱

第二章 死の棘

第三章 崖のふち

第四章 日は日に

第五章 流棄

第六章 日々の例

第七章 日のちぢまり

7

36

106

150

213

245

292

第八章 子と共に

第九章 過ぎ越し

第十章 日を繋けて

第十一章 引っ越し

第十二章 入院まで

326

356

387

456

482

死の棘

ブックデザイン

平野甲賀

第一章 離脱

私たちはその晩からかやをつるのをやめた。どうしてか蚊がいなくなった。妻もぼくも三晩も眠っていない。そんなことが可能かどうかわからない。少しは気がつかずに眠ったのかもしれないが眠った記憶はない。十一月には家を出て十二月には自殺する。それがあなたの運命だったと妻はへんな確信を持っている。「あなたは必ずそうになりました」と妻は言う。でもそれより早く、審きは夏の日の終わりにやってきた。

その日、昼さがりに外泊から家に帰ってきたら、くさって倒れそうになっているけんじんじ垣の木戸には鍵がかかっていた。胸がさわぎ、となりの金子の木戸からそつと自分の家の狭い庭にまわって、玄関や廊下をゆさぶってみたが鍵ははずれそうでない。仕事部屋にあてた四畳半のガラス窓は、とりとの境の棒くいを立てただけの垣のすぐそばで、金子や青木のほうからまる見えだが、ガラスの破れ目に目をあててなかを見ると、机の上にインキ壺がひっくりかえったままになっている。いきがつまり裏の台所にまわった。二羽だけの鶏が卵を生んでいたが、取り出す気にもならない。裏は小さな

町工場でからだをななめにしないと通れないほどの路地をへだてているだけだ。機械のまわっている振動をからだに受け、鉄をさくときの突きささる音響を耳にして、そのへんにありあわせた瓦のかけらで台所のガラス窓を一枚叩き割ると、自分の恰好が犯罪者のそれとかさなり足の底からふるえがのぼってきた。ながしには食器が投げ出され、遂にその日が来たのだと思うと、からだもこころも宙吊りにされたようで、玄関につづく二畳のまから六畳を通過して仕事部屋に突っ立った私の目に写ったのは、なまなましい事件の現場とかわらない。机と畳と壁に血のりのようにあびせかけられたインキ。そのなかにきたなく捨てられている私の日記帳。わなわなふるえだした私は、うわのそらでたばこを吸っていたようだ。ふたりのこどもを連れてどこか遠いところに行くつもりが、さしあたり駅前の映画館で半分だけ見て青冷めて帰ってきたが、前の日までの、三日と待たずに外泊のために出かけて行く夫に哀願していたときのおもかげはもうどこにも残っていない。そして妻の前に据えられた私に、どこまでつづくかわからぬ尋問のあけくれがはじまった。

「いったい、どういうのかしら」と妻は、くりかえし責めたててきたおなじ問いかけのところにもどってきては、そう言う。「あなたのきもちはどこにあるのかしら。どうなさるつもり？ あたしはあなたには必要なんですよ。だってそうじゃないの。十年ものあいだ、そのように扱ってきたんじゃないの。あたしはもうがまんはしませんよ。もうなんと言われてもできません。十年間もがまんをしつづけてきたのですから、爆発しちゃったの。もうからだがもちません。見てごらんなさい、こんなに骸骨のようにやせてしまつて。あたしは生きてはいませんよ。生きてなどいるもんですか。でもあ

なたにめいわくはぜつたいにかけませんからね。誰にもわからないようにじぶんを処分するくらいのはあたしにできます。あたしはそのことばかりずっと研究していたようなものだわ。あたしはあなたを解放してあげます。そのあとであなたは好きなようにその女とくらしたいでしょ」そして決着をつけるように、

「どうしてもね、これだけはわからないわ。あなた、あたしが好きだったの、どうだったの、はっきり教えてちょうだい」

「それは」と効果のない空しさのなかで私は返事をする。「好きです」

「じゃ、どうしてあなたはあんなことをしたんでしょう。ほんとに好きならあんなことをするはずがない、あなた、ごまかさなくてもいいのよ。きらいなんでしょう。きらいならきらいだと言ってくださいな。きらいだっていいんですよ。それはあなたの自由ですもの。きらいにきまっているわ。あなたね、ほんとのことを、あたしに言ってちょうだい。このことだけじゃないんですよ。もっともってあるんですよ。いったいなんにんの女と交渉があったの？ お茶や映画だけだと言っても、それはおんなじなんですからね」

それを私は次々に数えあげる。そのときは羽ばたき、今腐って悪いにおいがしはじめて見える暗い行為のすみかきなり。しかし言いきれず、思い出せないふりをして言い残すものもある。数え立てるとかずかずのいかがわしい過去の姿勢に、自分でおどろき、だが舌にのせる。

「あたしはね。やっぱり、あなたの日記を見てしまったときの決心を変えませんわ。あなたほんとにそれだけなの。まだかくしているんですよ。でももういいの、あたしは決心を変えません。あなた、

とめないでください。あなたという人はねえ」

「おまえ、ほんとにどうしても死ぬつもり？」

「おまえ、などと言ってもらいたくない。だれかとまちがえないでください」

「そんなら名前を呼びますか」

「あなたはどこまで恥知らずなのでしょう。あたしの名前が平気で呼べるの、あなたさま、と言いなさい」

「あなたさま、どうしても死ぬつもりか」

「死にますとも。そうすればあなたには都合がいいでしょ。すぐその女のところへ行きなさい。けどあなたとちがってあたしは生涯をかけてあなたひとりしか知らないんですからね。これだけははっきり言っておきます。しっかり覚えていてくださいね。あなただけがあたしのいきが良かったんだわ。あたしはからだもころもあなたにささげつくしました。あたしはうそを言ってるのじゃないのよ。それはあなただってみとめるでしょ。その報酬がこうだったのです。こんなひどいめにあわされて、犬ころかねこの子のように捨てられたんだわ」

「捨てはしない」

「じゃあたしはあなたのなんなの」

「妻です」

「これが妻かしら。妻らしいどんな扱いをしてもらえたかしら。なんにもしなかったじゃないの。あたしを女中とも思っていたの。妻の扱いをしなければ捨てたのといっしょじゃないの」

「とにかく死なないでほしい」

「あなた、口先だけでそんなことを言ってもね、あたしが死なないでいいような保証ができる？　今までのあたしとはちがいますよ。お金がかかるわよ。あなたのような三文文士にあたしが養いきれるかしら」

「努力します」

「どういふふうにするつもりなの」

「もう外泊はしません。ひとりでは外に出ません。外に出るときは妻やこどもを連れて出ます。妻のほか、女と交渉を持ちません」

「あたりまえよそんなこと。おとなりの青木さんをごらん下さい。日曜日になると、家族じゅうでだらんしてるじゃないの。映画にだってピクニックにだって、いつだって、家族といっしょよ。あなたは家庭的な奉仕をしたことがあるかしら。あたしをどこかにつれて行ったことがあるかしら。こどものことをかまってくれたことがあるかしら」

「一度あったと思うんだけど」

「いつ」

「ほら、神戸にいたとき、大丸の屋上庭園の木馬乗りに伸一を連れて行っただろう」

「あら、そうだ。そんなこともあったわね。そう言うんならそれは認めてもいいわ。十年間にたった一度だけね。そんなことってあるかしら。でもちょっと待って、あのときだって、あなたの旅行の準備の買い物に行ったついででしょ。あたしは家族的なんだらんがしたくてたまらないのにあな

たはいやいやくつついてきたじゃないの。そのときあなたが行ったのはどこの温泉だった。そこであなた何をしていたの。やったことをすっかりかくさないで言ってよ」

「わかりました。わかりました。これから家庭の奉仕をまずいちばん先に考えます」

「あなたにできるかしら。あなたのようにきたないことはかり考えているひとに」

問答は昼も夜もなくつづき、妻は家事にとりかかろうと思ひ出さない。もっともふたりには食欲も起こらなかったが、こどもたちは遊びのあいまにおなかをすかせてやってきても、親たちの陰鬱なようすを見ると小さな足音をたててまた外のほうにもどって行く。尋問がとぎれると、こどもらの空腹が気になり、六つの伸一におかねを渡して、ごはんのかわりになるようなおまえとマヤの食べたいものを買っておいでと使いに出すと、笛のついたあめや焼麦の駄菓子などを買ってくる。これじゃごはんにならないねえ伸一と言いながらちゃぶ台に坐らせるが、いつのまにか棒あめをくわえくわえ外に行ってしまう。洋服や顔はよごれ放しても、どうしていいかわからない。これらの気の配りはみな妻のくらしの日常のくりかえしのなかで維持されることがやつとわかるが、妻のほうはそれまでとかわってこどもにやさしくなっている私を他人の目つきで見ている。

次第に日が傾き、部屋のなかがうす暗くなっても電灯のスイッチをつけるきもちが起こらない。はなしはぐるぐるまわるだけで結末はつかず、妻の態度だけがますます確信を加えてくる。それまでの妻は私の目の動きにもおびえ、かえって私を不機嫌にした。私はその顔つきを消さず、妻はすべてをゆるし、あはくことをおそれてますますやさしくなった。もう一度だけゆるすことが生活の良知なの

にと苦しまざれに思い、そうすれば私は生まれかわるだろう。ゆるしてくれなくてもいいがこのため
まのない尋問のくりかえしは不毛だなどと私は腹の底で思う。こんなときには悪びれない態度をと考
えるが、かきたてられた過去のしかばねのなかではどうしてもおもてをあげていることができない。
行為の細部を数えるときに、駆け足をして通りぬけ、とぼけて知らぬふりをしたり、隠して言わぬこ
とのどうしても残るのがわれながら不審だ。

「たしかにそれだけなの。かくしているのじゃないの」

「いいえ、隠してなんかないない。いまさら隠したってどうなるもんじゃない」と私はいなむ。「ほん
とうね、うそ言っちゃいやよ」「うそは言いません」「ぜったいに?」「ぜったいです」私はまたい
なむ。ひとつを言えばふたつを言うも、同じなのに、ふたつめを言うときに、気づかれなければふた
つめは言わずに通り過ぎたいきもちの起こってくるのをどうしても払いきれない。でも別のところで
必ずそれをあらためて言わなければならなくなることがおそろしい。妻はそこを突き、私はどもって
二枚の舌を使い、訂正しようとして、きたない顔つきをこしらえた。長い夫婦の生活のなかで妻のこ
の追いつめのすぐれた技術にどうして私は気づかなかつたろう。断定を単純に言いきって、必ず相手
の言い分をあいまいな立ち場に追いこんでしまうみごとなロジック。三日のあいだのもつれあつた不
眠のとりしらべのあとで、私は妻の疲労のない顔に見とれ、自分をどうしても弁解する余地のない、
いやしい男と思いはじめた。きつと妻の言う不浄なけものにまちがいはない。どういうつもりで私は
長い歳月をけものようなことばかり考えて過ごしてきたのだろう。

「あなた軍隊でそんなことばかり覚えてきたの」と妻は言うが、それは軍隊で、でなくて軍隊の前か

らだ。学生のころの或る日から、きたないことばかり考えはじめた。だが私はみたまされたことはない。そこに傾く姿勢がリアリストに見せかけることができると思ひこんでいた。妻の服従を少しもうたがわず、妻は自分の皮膚の一部だとこじつけて思い、自分の弱さと暗い部分を彼女に皺寄せして、それに気づかずにいた。過ぎ去った十年の歳月を妻にさし示されてみれば、私は自分のことばかり考えて悩み、妻はひたすら身を捨てていたことをうたがうことができない。ときには嫌悪が起きて、おまえは獣身の自分のすがたが氣にいったからだろうと言ってみるが、それは空転してかみあわない。

夜がくると、こどもらは昼間着たもののまま、ふとんをかぶせられた。頬のあたりにおびえを残して伸一もマヤも親たちのそれまでにはなかった異様な対峙を横目に見て、でもすぐ眠りに落ちてしまふ。それはいくらか私をなぐさめる。こどもらのそのひよわな重さのほうに妻のきもちを向けようとくわだててもみるが、すぐその考えは伏せなくなる。もう二十年も二十五年も前のことになろうか。母が家を出て行ったとき、こどもらを抱きかかえて流した父のおそすぎた涙に、幼い私は身方することを恥じたのだが、そのみにくさを自分にかぶろうとしている。妻は事故をかたわらで眺める目をして、手をさしのべようとはしない。

「ほら、かわいそうでしょ。そのこどもたち。でもあたしはもうこどものせわはしませんよ。どうぞあなたがしてください」

と言っていたかと思うと、いきなり立ちあがり、台所の板のまに坐りこんで動かない。妻からはなれてはいけないと思ひ、くっついて行っといっしょに坐っていると底のほうから冷えてくる。からだに悪いと言っても耳をかさない。

「おかしいじゃないの。急にあたしのからだの冷えるのが心配になったのかしら。あたしにはね、ここにこうしているのが似合っているの。この二、三日あなたにいろいろなことを言ってきました。しかしそれはまちがっていましたわ。あなたに悪いところはひとつもありません。あなたは深い深い考えでひとつのことを追求してこられたのです。妻とこどもを犠牲にして、じぶんじんのからだをこわしてまで、じぶんのしごとを大事にできたひとです。今さら俗人のあたしが何を言うことがあるでしょう。そうでしょ、あなた。だからあなたはこんなぼろきれみたいなあたしにかまわなくてもいいのよ。おすきなように今まで通りなきたない文学的な生活をつづけたらいいでしょ。あたしにはこの板のまがちょうどいいのです。こうまいな芸術生活はわかりません。ここはあたしが押し入れをこわしてつくった台所です。あたしがじぶんでつくりました。あなたはちっとも手つだってはくれませんでしたからね。そうそう、おかねはみんなあなたのものでしたわ。あなたの大事なおかねを使ってごめんなさいね。でもあたしはあなたの妻じゃなかったのだから、そうでしょ、妻の扱いをしてくださらなかったのですから、女中のお給金だと思って、あたしが使った分は、あたしが自由に使ってもよかったですよ。こんな安い女中が、世界中どこをさがしたってみつかるものですか」そして雑巾がけをする恰好で板のまをなでさすり、「ここであたしは三度三度のごはんごしらえをし、お洗濯をし、あなたが帰らない晩はこうして坐りつづけていたのです」

工場やとなりの家々のいらかにはさまれてのこされたほんのわずかの空間に、夜の空がはめこまれ、やせ細った月が、刃のように見えた。昼間の鼓動のような騒音は夜の闇に吸い取られ、ときたまタイヤをアスファルトから剝ぎ取るように疾走するタクシーのひびきがきこえてくるほかは、物音はない。